

ベルマーク便りコンクール2020 入賞校を訪ねて

入賞22校(11月号参照)のうち、2月までにお話を聞くことが出来た6校の記事を掲載します。どれもコロナ禍という状況にもかかわらず、熱意と工夫で活動を続けてくれた学校でした。

佳作 釜石市立唐丹中学校

岩手県釜石市の市立唐丹中学校(菊地正道校長、生徒25人)の生徒会通信は「Level up」というタイトルです。「生徒全員で一緒にレベルを上げ、前に進んで行こう」という思いが込められています。



今年度は九州を襲った7月豪雨で、ベルマークによる支援に集中的に取り組み、生徒会通信でアピールしました。その前向きな姿勢が評価されました。

「Level up」は毎回、生徒会長の久保翔太さん(3年)、副会長の中居林優心さん(3年)、執行委員の鈴木春花さん(2年)と武藤詩織さん(2年)、応援団長の尾形愛さん(3年)という執行部5人全員が作成に携わりました。ポイントは「活動の写真や生徒の考え、感謝の言葉を入れること」だったそうです。

熊本県を中心に九州各地に被害をもたらした7月豪雨。それを知った副会長の中居林さんは「東日本大震災のとき支援してくれた西日本の方々に、感謝の気持

ちを送りたい」と考えました。東日本大震災で唐丹中は校舎が一部損壊。近くの唐丹小は津波で全壊しました。今は2校で新しい校舎を共有しています。

中居林さんは、さっそく自分たちに出るようなことを書いたメモを作りました。その中にベルマークを活用した支援というアイデアがあり、生徒会での実践が決まりました。目標は2万点です。

最初は全校生徒と15人の教職員で活動を始めました。でも「もっと支援の輪を広げたい」と商店や公民館などに直談判し、回収箱を設置してもらいました。また9月を「ベルマーク回収強化月間」とし、唐丹小の全校児童45人やその保護者も引き込んで多彩な活動を展開。その



結果、見事に目標点数を達成しました。「中学生だけでは成し遂げられない多くの点数を集めることが出来た」と5人は実感したそうです。

今後、熊本県球磨郡の中学校に必要な備品を贈る予定です。

優秀賞 杉並区立桃井第三小学校

東京都杉並区立桃井第三小学校(末永弘校長、児童452人)は今年度、「集まらなくてもできるベルマーク活動」に取り組んでいます。子どもたちの協力を得るため、説明用の動画も作成。この動画が評価のポイントになりました。



コロナ禍で今年度のPTAは当初、役員以外の係が決められず、副会長の一人、本村由美さんがベルマーク担当を兼ねることになりました。本村さんは仕事を休んで来る人もいた従来のベルマーク作業に疑問を感じていたそうです。「誰もが簡単にできて効率的な方法があるはず」。他の役員とも話し「集まらなくてもできる」新しい方法を検討しました。

それが「ベルマークポケット」の採用。子どもたち自身が、持参したマークを会社番号別に入れていく仕組みです。ポケットは本村さんが100円ショップで材料を買って作りました。

動画も本村さんの作。「子どもの誕生日に動画を作った経験が役立ちました」。1年生でもわかる内容を心がけ、集中が続くよう5分以内にまとめました。

最終的な仕分け・集計は保護者の自宅作業になりました。本村さんは、作業手順書や整理袋を入れた作業キットも用意しました。活動の変更は保護者へのお便りで周知し、動画はYouTubeにアップ。QRコードをお便りに載せました。学校も協力し、2学期になると各クラスで動画を上映してくれました。

こうした準備を重ね、ベルマークポケットは10月中旬、校舎1階の廊下に常設されました。今後さらに改善してスムーズな体制を整えていく予定です。

「子どもたちのために何かをしたいのに、時間を割けない方も多い。コロナ禍もあって、活動を変えることへの理解がありました」と本村さん。負担を減らしたうえで、新たに導入したウェブベルマークとの両立を目指したそうです。



特別賞 町田市立成瀬台小学校

東京都町田市の市立成瀬台小学校(中村雄一校長、児童638人)が初応募で特別賞を受賞しました。「ベルマークだより」を発行するPTA家庭学級委員会は、昨年度から活動活発化の取り組みを進め、その一つがお便りの見直しでした。

きっかけは、昨年度のベルマーク担当だった鷺津宏子さんが5月に町田市で開かれた運動説明会に参加したことでした。そこで、ベルマークがハンディのある学校への支援になると初めて知りました。それまで「正直、面倒だと思っていた」そうですが、「気付いたら前のめりになって聞いていた」と笑います。

趣旨に共感した鷺津さんは、活動の活性化をメンバーと模索。認知度の低かつ



た運動の持つ役割を広めようと、「周知活動」を1年間のテーマに決めました。

それまでテンプレートに沿って作っていた「ベルマークだより」は、新たに商品



画像を取り入れたり、フォントを工夫したりして、見栄えをアップしました。みんなで話し合いながら内容を決めていくそうです。また、回収箱を目立つデザインにリニューアルし、PTA室前の掲示板には大きなベルマークコーナーを設けて飾り付けました。

年賀状印刷でインクカートリッジが意識にのぼる年末年始には「ベルマーク回収強化期間」を設定。校内放送などで呼びかけました。校外のデイケアセンターやコンビニ、飲食店にも回収箱設置の「営業」をかけ、子どもたちには「ベルマークで買ってほしいもの」のアンケートを実施しました。保護者にウェブベルマークをアピールするためQRコード付き腕章を手作りし、運動会で委員が着用して宣伝しました。

コンクールの賞金の使い道は、子どもたち全員が読めるよう、図書室に置く本が候補になっているそうです。

特別賞 練馬区立立野小学校

東京都練馬区立立野小学校(幅=はば=健司校長、児童483人)ではコロナ禍の今年度、PTA代表委員会の10人がベルマーク活動を展開。学級活動・行事部長の木曾真弓さんが中心になって作ったお便りが特別賞に輝きました。

いつもは年2回、児童たちがベルマークを持参して担任に提出。1～4年の各



クラスから募った保護者のベルマーク係が主に仕分け・集計します。ところが今年度はコロナ禍でPTA活動が大幅に縮小、ベルマーク係はなくなりました。でも活動自体はなくせないと、木曾さんたち代表委員会が作業を引き継いだそうです。応募の手紙には「子どもたちのためにベルマークだけは続けることに決めました」と書かれていました。

同校のお便りの特徴は、裏面に描かれた折り線で折ると回収袋になること。そこに今年度、新たな試みが加わりました。後々の手間を省くため、保護者や子ども

たちに、あらかじめマークを仕分けをお願いするYouTube動画を作り、そこに誘導するQRコードを掲載したのです。

動画を作ったのは木曾さん。ベルマークを会社・点数別にテープで貼りつなぐ方法を実演し、自らスマホを固定して撮影しました。臨時休校などでPTA活動が止まっていた間に「お便りで伝えにくい部分も、動画なら分かりやすい」と考えたそうです。お便りは7月に保護者に配布されました。

木曾さんは「鈴刻印(ベルマーク)浪漫」と題した手書きの印刷物も作りました。人気アニメ「鬼滅の刃」を題材にとった物語で、舞台は現在の学校、「鬼」は新型コロナウイルスです。11月に校内に掲示した後に配布され、子どもたちの人気を集めたそうです。

受賞について木曾さんは「驚き、喜び、そして、お便りを作ってよかったという達成感がありました。コロナ禍でも力を合わせて何かを成し遂げることが出来たのはうれしい」と話しました。

